

質的研究における分析と解釈()

日記のデータベース化とコーディング

近 藤 敏 夫

〔抄 録〕

質的研究で共同研究を行う場合、分析や解釈の過程で研究者のトライアンギュレーションが求められる。その準備として共通のデータベースを構築する必要がある。さらに、質的研究と量的研究のトライアンギュレーションを視野に入れるならば、データベース構築の際に信頼性を確保する必要がある。ところが、質的研究のデータの多くは、調査者と対象者との相互行為から生み出されるため、例えばインタビュー調査では調査者の態度や価値観が対象者の語りに反映する。さらに、インタビューの録音をトランスクリプトする際にも、研究者ごとにさまざまな手法があり、分析や解釈の基になるスクリプトに研究者のバイアスが反映する。これに対して、日記、手紙、自叙伝等の生活記録は調査以前に書かれたテキストであるため、調査開始からスクリプトの作成にいたるまでの、調査者によるバイアスに影響されることがない。ただし、日記をデータとする場合でも、テキストをデータベース化する際には、調査者のバイアスが反映する。バイアスを縮小させるためには、調査者のトライアンギュレーションを実施し、データベースの共通性を高める必要がある。また、日記面接やその他の情報を補足して日記のデータベースを構築し、コーディングする際にも研究者のトライアンギュレーションを実施する必要がある。本稿ではパソコン・ソフトのエクセルを活用して、日記テキストのデータベース化とコーディングの実例を示す。

キーワード 日記分析、トライアンギュレーション、データベース化、コーディング

1. 日記分析の意義

1.1 問題の設定

質的研究は初期シカゴ学派のモノグラフにその起源をみることができ、アメリカの社会学では量的研究と対抗関係にあるかのように考えられてきた。しかし、量的研究も、時期は多少遅れるが、シカゴ学派で展開されてきており、近年では質的研究と量的研究が相互に補完されるべきことが指摘されている(Punch 2005:240-243)。初期シカゴ学派社会学の重鎮であるR.E.パークは、質的研究と量的研究の統合を提唱していたとも考えられる(Park 1925:18)。今日の観点からすれば、初期シカゴ学派では質的研究のトライアンギュレーションばかりで

なく、質的研究と量的研究のトライアングレーションが実践されていたといえる (中野 2003:24-25)。

質的研究の代表は参与観察やフィールドワークのデータを用いてなされる。調査者が現場で直に対象者と接して得られるデータが重視される。フィールドノート、インタビューの録音、写真、ビデオなどがデータになる。調査者がフィールドに入り、インフォーマントと接し、各種データを収集するまで、さまざまな問題が介在する (フリック 2002)。ただし、本稿では、質的研究における分析と解釈にテーマを限定する。質的データをどのように分析、解釈しうるか、とくに質的研究と量的研究が相互補完しあう関係にあるとみなし、その中での質的データの処理の仕方を検討する。

本稿では調査者と研究者を区別して用いる。調査者とは (a) データを収集し、(b) その生のデータをデータベース化する者である。研究者とはデータを基にして分析や解釈を行ない、論文を執筆する者である。研究者が調査者と一致することもあるが、実際の調査研究ではそうとは限らない。とくに量的研究におけるアンケート調査では、実際に面接してデータを収集し、その生のデータをデータベース化するのには、アルバイトの学生や大学院生または調査会社の調査員であることが多い。これは調査者が誰であっても収集される生のデータやデータベースに、原理上、バイアスがかからないという前提があるからだろう。しかし、(a) 面接調査が調査者と対象者との相互行為である以上、調査者が誰であるかによって回収率に大きな差が開くこと、また調査前にいくらインストラクトを実施しても、調査者によってアンケートの回答に何らかの傾向が生じることは、原理上、起こることであるし、経験上もよく知られていることだと思う。(b) データベース化に際しては、量的調査でバイアスは基本的に問題にならず、転記ミス、入力ミスやクリーニングの問題になるだろう。

他方、質的研究においては、(a) 調査者が誰であるかによって収集されるデータに差が生じるという理解がある。そのため、アルバイトの学生にインフォーマル・インタビューを代行させるということは考えられない。したがって、質的研究では調査者と研究者が一致していることが多い。(b) インタビューの録音をトランスクリプトする場合は、アルバイトの学生や大学院生、調査会社の調査員が作業にあたる場合もある。しかし、スクリプトには、厳密に考えれば、調査者によるバイアスが反映する。また、スクリプトをデータベース化する際にも、調査者によるバイアスが影響する。それゆえ、エスノグラフィーなどの質的研究においては、調査の準備から論文の執筆まで調査者と研究者が同一人物であること、いわゆる個人芸が一般的である。ただし、質的研究では共同研究も盛んに行われてきており、そこではデータベースの共有が求められる。本稿では、日記分析における共同研究を念頭におき、(b) データベース構築に際しての、バイアスの縮小およびバイアスのもつ積極的意義について検討する。

1.2 テキストの信頼性

本稿では質的研究のデータとして日記を取り上げる。インタビューによる生活史調査など、質的研究におけるデータの多くは、調査者と対象者との相互行為から生まれる。そのため、まず対象者とどのようなラポールがとれるかで、インタビューの内容が異なってくる。しかし、日記、手紙、自叙伝等の生活記録は、調査開始以前に対象者が書いたものであり、調査

者と対象者との相互行為の産物ではない(ただし、研究者が対象者に依頼して日記や自叙伝を書いてもらうこともあるが、本稿ではこの種の依頼文書を含めない)。残念なことに、日記は社会学の分野でこれまで活用されてきたとは言いがたいが、質的研究における分析と解釈の問題を特化して扱うには格好の材料になる。というのも、日記は、それを収集したときの調査者のバイアスを除外して、純粋に対象者の主観的側面を分析し解釈することが可能なデータだからである。

通常、質的調査で収集されるデータには多様な形式がある。しかし、最終的に研究者が論文を執筆する以上、音声データであれ、画像・映像データであれ、文字によるテキストに変換される。各種の生のデータをテキストに変換する際に、さまざまな問題が生じる。近年、インタビュー調査ではボイスレコーダが使用され、調査の後に音声データが文字データに変換される。このトランスクリプトが質的研究の流派によって、その厳密さを異にする。どの研究者も対象者の語りを忠実にトランスクリプトすることを前提にするが、例えば会話分析では、沈黙の時間を0.1秒単位で表記し、会話の割り込みも、その箇所が分かるように表記される。沈黙や割りこみ、その他、会話の機微を表記する工夫がなされ、それらの表記が分析や解釈にとって重要になる(桜井 2002:177-180)。分析や解釈の基になるデータ、つまりトランスクリプトされたテキストがいかに作成されるか、この段階でも調査者のバイアスが影響する。また、トランスクリプトの際に録音の不鮮明な箇所の処理の仕方でも、テキストの内容や会話の印象が異なってくる。小声、相づち、イントネーション等を調査者がどのように処理するか、転記ミスというレベルではなく、調査者のバイアスが影響する側面もある⁽¹⁾。

その点、日記のテキストは調査の開始からスクリプトの作成までの、調査者によるバイアスの影響を受けない。日記は最初から対象者が文字のテキストで記述しており、研究者は生のデータをそのまま論文執筆用のデータとして使うことができる。量的研究における信頼性とは異なるが、日記は誰が調査したかによって研究の基になるデータが異なっていない。

1.3 テキストの同時代性

質的研究の調査ではインタビューがなされることが多い。その代表は生活史の聞き取り調査である。調査者と対象者の相互行為から生活史が作り出されることから、どの時点で誰がどのような状況で調査するかによって、対象者が語る過去の内容、つまり、ある意味では創作される過去の内容が異なってくる。

これに対して、日記は基本的に対象者がその日のうちに書き記した過去のデータであり、対象者が過去を回想しながら作る生活史とは異なる。日記は対象者が過去の時点と「同時代に(contemporary)」書き記したものである(Plummer 2001:48-49)。厳密には、その日の内に書いた日記であっても、過去もしくは現在完了の時点での出来事の記述である。しかし、その記述の仕方は、その日の出来事を記述することによって、つぎの日の予定や今後の方針等に言及するものである。つまり、日記には未来完了の記述も含まれる。日記はただ単にその日の出来事を記述するだけでなく、対象者の過去、現在、未来を反映している。他者理解には過去からの理由動機とともに未来への目的動機を知ることが重要である(Schütz 2004[1932]:195-209)。対象者の生きてきた現在は、その時点での過去と未来を含意した幅をも

つものである。その対象者の現在（調査者にとっては過去）と「同時代」に記述された日記は対象者の意味世界や生活世界を解釈する上で重要なデータになる。日記や手紙などの生活記録は、対象者の生きてきた現在と「同時代」の視点から、つまり、その時点における対象者の「いま、ここ」の視点から構成される意味世界や生活世界を知るための信頼できるデータになる。

1.4 日記の創作性と補足資料の必要性

ただし、日記が過去と同時代に書かれたというだけで、過去の事実がありのまま記述されているわけではない。対象者は日記を書く時点で、その日の出来事について何らかの創作を試みている。日記を書き続ける期間が長くなればなるほど、書き手は出来事を取捨選択し、ひとつのまとまったストーリーを創作する傾向がある（Plummer 2001:48-49, 187）。そのため、日記の記述が対象者の当時の状況をありのまま表していることにはならない。場合によっては、日記を補助・補足するデータを収集し、対象者が書かなかったこと、または書けなかったことに解釈を施すことが重要になってくる（水越 2002:47-49）。

日記の創作性から対象者の主観的世界、意味世界を解釈することは、日記分析の重要な課題である。そのために、日記が書かれた時点の状況を調べることによって、対象者がどのように日記を創作していたかを知る必要がある。日記を補助・補足するデータとして、当時の新聞記事や対象者の職業に関する資料、また対象者の生きてきた時代の郷土史料などが重要である。これらは日記と同様、調査者と対象者との相互行為の影響を受けないテキストである。さらに、調査者が対象者やその家族、友人等に日記面接を実施することがある。日記面接法には、調査者が対象者に日記執筆を依頼すると同時に、日記の内容について対象者にインタビューを実施する手法がある（Plummer 2001:51）。また、本稿で取り上げる『米澤弘安日記』のように、書き手の米澤弘安が故人であるため、その妻子や知人に日記面接を実施することがある。こうして、対象者が書かなかったもう一つの生活史が家族や知人の語りによって明らかになり、それと対比して対象者の創作性が解釈できるのである（古屋野・青木 1995:67-68）。

『米澤弘安日記』の共同研究⁽²⁾では、日記という主観的な生活記録を中心のデータとし、それを補足するデータとして妻子への日記面接を実施してきた。また、当時の新聞・雑誌、郷土史料等を収集するとともに、人口動態や経済指標等を示す各種統計資料を収集し、それらをパソコン上でデータベース化していく予定である。

2．日記データベースの作成

2.1 『米澤弘安日記』の概要

米澤弘安（1887年～1972年）は石川県金沢市の象嵌職人であった。先祖は代々白銀屋を称し、加賀藩の白銀細工、刀装金具の職人であったが、父親の代で象嵌技術を習得し、姓も米澤に改め帯刀した。弘安は次男であったが、長男が名古屋市で日本画を描くことになったこともあって、父親を継いで象嵌職人になった。彼は30歳で結婚、家督を相続した。問屋や近

所の顧客から注文を受けて象嵌を細工し、生計を立てていたが、展覧会に出品する作品も多数製作しており、その多くが賞を受け、晩年には石川県指定無形文化財認定書や文化庁無形文化財選択書を授与されている(田中1974:14-15,水越2002:38)。

日記は1906年の元旦から1972年の晩年まで書かれた(400字詰原稿用紙換算で4,336枚に相当)。とくに1909年(明治42年)から1925年(大正14年)にかけては弘安が仕事と生活の両面で充実した時期でもあり、ほぼ毎日のように日記が書かれた。金沢市では弘安の日記を刊行することになり、1906年(明治39年)1月1日から1933年(昭和8年)9月15日までの日記が上・中・下・別巻の4冊(日記本文計2,227頁)で刊行された。米澤弘安日記編集委員会の編集方針は、できるだけ日記を忠実に再現することであり、そのため弘安の思い違いによる誤記や漢字の間違い、「・」、「」、「」、「」等の記号も弘安が書いたままの形で刊行されることになった。

2.2 弘安による日記文章の分類

弘安の記号は記述内容の分類を示すものである。「・」は通常の日記記述の文頭につけられた記号で、家族、友人、近隣、仕事、神社や寺への参拝、旅行等の出来事が記述される。「・」は『米澤弘安日記』に25,340箇所みられる。「」は新聞記事や見出しの抜き書きの文頭に付けられることが多いが、要約がなされている場合もある。記事の内容は政治、経済、社会、スポーツなど多岐に渡る。「」は全部で2,093箇所につけられている。「」は新聞その他の情報を要約した文章の文頭に付けられることが多く、全部で174箇所ある。その他に箴言や格言の文頭にも「」が付けられている。弘安は読書家ということもあって、シェークスピアなど出典が明記されているものもあれば、世間で通用する人生訓が引用されている場合もある。「」は日記執筆の初期に多く見られる。おおむね新聞その他で得た情報が記載されている。「」は全部で340箇所あるが、そのうち300箇所が明治45年5月までに付けられた。その後の日記には散見されるだけである。「」、「」、「」については、その三者に明確な区別がみられず、日記記述の情報源が新聞・雑誌や書籍等であることを示している。これに対して弘安自身の文章には「・」の記号が付けられている(ただし日記刊行に際して弘安による記号の付け忘れ、付け間違いと考えられる箇所は編集してある)。

幸いにも『米澤弘安日記』では弘安自身が日記記述の分類記号を付してあったので、その分類に基づき、2,227頁に及ぶ日記のテキストをデータベース化することが可能であった。日記の全テキストを34,980箇所に分割し、エクセル形式でデータベース化した(表1)。エクセル画面で左辺の列が行番号、A列が日記の書かれた年月日と日記記述の段落番号を示している。例えば22453行目の「大8年9月1205」は、大正8年9月12日の日記の第5番目の段落であることを示す。同行B列「2415」は『米澤弘安日記』の中巻(つまり2番目の巻)の415頁に本文が掲載されていることを示す。同行C列「東京米相場六十五円の暴騰價となる」は日記本文である。D列以下は、日記面接やその他の補足資料の情報を記入したり、後の分析でメモを記入したり、コードを付けたりする箇所として活用することができる。

表1 『米澤弘安日記』のデータベース

	A	B	C	D
22448	大 8 年 9 月 1200	2415	十二日 金 半晴	
22449	大 8 年 9 月 1201	2415	・母は金子様と午前九時過野田桃雲寺の法會ニ参詣せられた午後七時帰らる	
22450	大 8 年 9 月 1202	2415	・土方の通治様、今朝一番列車にて谷の灸をしに行つて来たとして十一時半頃一寸寄られあんころを貰った 身体中二三十計もすえたと	
22451	大 8 年 9 月 1203	2415	・夜、川口君が指輪を持つて来て波二千鳥を彫つて呉れと十五日迄二と申され志が、出来ないと断つたが、それでは二十日迄二して呉れと	
22452	大 8 年 9 月 1204	2415	森村市左衛門(男爵)十一日午前零時四十五分薨去せらる 信仰の厚き人なり	
22453	大 8 年 9 月 1205	2415	東京米相場六十五円の暴騰價となる	
22454	大 8 年 9 月 1300	2415	十三日 土 曇り	
22455	大 8 年 9 月 1301	2415	・水野様と山川様御出あり 共勵會の額の夕顔亭の圖ニ付協議をなし、決果今一度圖を書き直して貰ふ事なし瓢庵の額と歌或八詩を象眼する事二定む(后一～三)	
22456	大 8 年 9 月 1302	2415	・母は午前張物をせられたが曇つて午后止められた 芳野八二階の障子張をする	
22457	大 8 年 9 月 1303	2415	・母は喜代子を負て宮市迄滋養糖を買ひ二行かれた(后三)	
22458	大 8 年 9 月 1304	2415	・夜、芳野八お里へ紐を持って行く 掛物代を持って行きしか取られざりき	
22459	大 8 年 9 月 1400	2415	十四日 日 晴後曇り	
22460	大 8 年 9 月 1401	2415	・今日より安江神社の祭礼なり 午后三時より能舞台ニ於て舞囃子、田村、六浦、船弁慶ありと 曇りて居るが降らず 夕頃バラバラ降りしか夜八降らざりき	
22461	大 8 年 9 月 1402	2415	・土方鉦ちゃん午前中遊二来た 少年世界を買つて来た 午后三時頃芳野と安江神社へ行き、ハジキ鉄砲を買つて来てボンボンやつて居た 夕帰らる	
22462	大 8 年 9 月 1403	2416	・夜、清二は長田屋へ明日お祭ニ御出なさいと云い二行く 僕は荒木方へ行く 純一八尾山座へ行って不在 明日は茸狩二行くとか云つて居たと二人様二話して土方様へ行く お父様も皆居られた 今日又お父様は谷の灸をし二行つて来た 明日祭ニ来られるやら話して帰る 十時	
22463	大 8 年 9 月 1500	2416	十五日 月 雨	
22464	大 8 年 9 月 1501	2416	・安江神社の本祭なるが朝より夕頃ニ至るも降雨止まず 夜に入りて益々降る	
22465	大 8 年 9 月 1502	2416	・鉦ちゃんが遊二来て荒木純一も遊二来た 午后より日暮ニ通治様御出二なつた 純一は大正琴を宅より持来た 清二のハイオリンと互やつて居た 終日の雨にて外へ出る事が出来ない 又長田つき姉と藤掛よりも誰も来ない 内輪にて一杯始めて九時半頃通治様は鉦ちゃんを連れて帰られた 純一は泊る	
22466	大 8 年 9 月 1600	2416	十六日 火 雨	
22467	大 8 年 9 月 1601	2416	・今日も終日降る 梅雨のやうだ 東京は暴風雨であつたと	
22468	大 8 年 9 月 1602	2416	・白山君が昨日来たとして一寸尋ねて来られた 二三日にて又京都へ帰ると(后二)	

2.3 テキストの分割に関する一般的注意

『米澤弘安日記』のデータベース化には弘安自身の分類を活用することが偶然にも可能であったため、調査者によるバイアスがほとんどない。しかし、一般的にテキストのデータベース化には研究者のバイアスが反映する。

テキストをデータベース化する際に問題となるのは、どの単位でテキストを分割するかである。というのも、データの分割単位が後の分析に影響を与えるからである。一般的に最も細かい分割単位は文節である(ただし会話分析の沈黙や割り込み等の表記は文節レベルよりも厳密である)。この文節にメモやコードを付けて分析することになる。テキストの分割単位は、文章であったり、パラグラフであったり、テキスト全体であったりする。分割単位は分析の目的に合わせて、適宜、選択される(フリック 2002:221-224)。文節や文章でテキストを分割する場合は、文法規則に従うため研究者によるバラツキは原理上ない。しかし、パラグラフ単位に分割する場合は、テキストのどこで意味のまとまりを区切るかが、研究者ごとに異なってくる。

筆者が以前参加した在日韓国・朝鮮人の生活史のインタビュー調査(谷 2002)でも、データベースを構築し始めた頃は、パラグラフの区切り方が研究者ごとに異なっていた(区切り方そのものがテキストの分析や解釈に関わるため、質的研究においてデータの加工を実施する者は「調査者」というより「研究者」であろう)。質的研究の手法を共有している研究者間でも区切り方のパターンは一致しにくいのである。研究者が互いに区切り方の意味を話し合って調整した結果、語りの文脈を一切無視して一つのパラグラフに一つの意味を持たせることを原則とし、テキストを分割することになった。区切り方のモデルを作成し、30分から1時間ほど練習すると研究者によるバラツキがほとんどなくなった。こうして10名以上でテキストを分割し、スクリプトをデータベース化した。このときの生のデータは、57名のインフォーマントに1時間半から2時間のインタビュー(および再調査のインタビュー)を録音したものであったが、最終的にカード総数13,337枚のデータベースを構築した(パソコン・ソフトは「知子の情報 ver.8」)。分割の仕方やコーディングの仕方について課題は残ったが、データベースは分析や解釈を補助する道具として役立った。このときのデータベース構築は、研究者のトライアングレーション(investigator triangulation)を実施して、研究者のもつバイアスを最小にする方法であったといえる(フリック 2002:282)。なお、この方法は弘安の娘に実施した日記面接のデータベース作成にも応用した。9名の大学院生と学生にテキストを分割してもらい、各人の区切り方の意味を話し合った後で、筆者が最終的にパラグラフ単位にテキストを区切ってデータベース化した。

テキストはひとつの全体としてまとまっており、全体の文脈や背景を抜きにしては存在しえない。それゆえ、質的研究においては、基本的にテキスト全体を常に参照する必要がある。しかし、膨大なテキストをそのまま分析の単位にすることは事実上、困難である。テキストを分割してデータベース化することが今後の質的研究では不可欠になるだろう。筆者自身はデータベースを分析や解釈のための補助手段として使用し、パソコンそのものに分析をさせていない。『米澤弘安日記』の原本を座右に置き、エクセル画面と対応させながら分析や解釈を行なうようにしている。

欧米では質的研究用のパソコン・ソフトが複数存在し、量的研究とのトライアングレーションをも視野に入れて質的データの解析が進んでいる(Kelle 2004, Flick and Steinke

2004:379-380)。日本でも数量化の技法を発展させたパソコン・ソフトが開発されており(統計研の WordMiner)、質的データの解析ソフトを用いた研究が今後、盛んになるものと予想される。ただし、この段階でも根本的にはデータベース構築の仕方は研究者に委ねられる。とくにテキストをパラグラフ単位に分割する場合は、区切り方が研究者の判断に依存せざるを得ない。質的研究と量的研究の相互補完を視野に入れるならば、データベース化の際に研究者のトライアングレーションを実施し、バイアスを縮小しておく必要があるだろう。

3. 日記のコーディングとデータ群の抽出

3.1 生活記録に対する研究者と対象者の位置

研究者は生活記録に対して対象者と異なる位置に立っている。『米澤弘安日記』の場合は、研究者は現在の時点から日記を分析し解釈することになる。この際、研究者がもつ間主観的枠組みや世間一般の常識が解釈に影響を及ぼすことになる。ただし、このバイアスは排除すべきものというより、過去のテキストを研究する際の現代的意義として評価されるのが通例であろう。研究者のバイアスは、データベースの共有化という観点からは縮小・排除すべきものだが、テキストの分析や解釈をする際には、研究者の問題関心や研究目的を示すものとして評価される。それゆえ研究者のトライアングレーションは、共同研究の意義を明示化し、さらに研究の意義を共同で創出するための方策にもなる。各研究者は先行研究をレビューし、暫定的に分析図式を提示しておく方がよい。各人の分析図式は、データと対話させる過程で、また他の研究者とのトライアングレーションの過程で、改変していけばよい。

研究者各人は先行研究のカテゴリーや概念、研究目的、問題関心などから研究テーマを決めるが、共同研究においては、それらの情報を共有しながら研究の意義が明確になり、創出されていく。この意味で現在の時点における、研究者個人の目的や関心と、研究者としての(また生活者としての)間主観性が重要である。テキストは研究者の言葉によってメモが書き込まれ、コーディングされる。研究者が参照してきた参考文献の情報を明示化し、論文等では公表する必要がある。また、研究者が生活者として受容しているものの見方や考え方もも自覚する必要がある(これに関しては論文等で必ずしも公表する必要はないだろう)。

他方、日記、手紙、自叙伝等の生活記録は、対象者が過去の時点に記述したことである。対象者は過去の時点で意味付与を行っており、その際、対象者の意識、関心、間主観的枠組み、その当時の世間の常識等が影響を及ぼすことになる。『米澤弘安日記』を通読してみると、職人の世界、家族・親族、近隣・仲間等の準拠集団、および一般社会の問題が多岐にわたって記述されている。弘安からみた意味世界、生活世界の構造が日記を通じて分析可能である。

しかし、日記に弘安の意識や関心が表現されるとしても、本人が意識的に記述しない事柄もある。また、間主観的枠組みやその当時の世間の常識等は、弘安が疑問の余地なく受容している場合もあり、日記に記述されないこともある。そこで、『米澤弘安日記』の共同研究班では日記を補足するデータとして、弘安の妻子に日記面接を実施してきている。また、弘安の知人でもあった郷土史研究家の田中喜男による弘安の伝記(田中 1974)も重要な補足資料になる。この伝記には『米澤弘安日記』に掲載されなかった日記もあり、貴重な情報源であ

る。その他、当時の金沢の職人に関する郷土史料や大正期を中心とする日本の近代化の諸相を示す資料等、通常のフィールドワークと同様にさまざまな情報が必要である。

対象者と研究者それぞれの空間的位置(社会関係)が分析や解釈に影響を与える。対象者や研究者は何を誰との関係で記述しようとしているのか。この意味で、対象者の(広義の)政治性を知るだけでなく、研究者の政治性を明示化し、反省する必要がある。それだけではなく、日記分析に際しては対象者と研究者の時間的位置(歴史性)にも注意しなければならない。

図1に示すように、対象者は過去の時点で経験した事柄を書き記すが、その際、対象者によって一次的な意味構成がなされている。研究者は現在の時点で、その一次的意味構成を材料にして科学的見地から二次的な意味構成をすることになる。ただし、ここで注意しなければならないのは、対象者の構成した過去の「事実」(一次的意味構成)が、研究者の構成する歴史的「事実」(二次の意味構成)を因果的に規定することはないということである。むしろ、研究者の構成する歴史的事実の条件は、現在の状況から新たに作り出されるものである。それゆえ、歴史的条件は過去の「事実」が本来もっていたものではない(近藤 1997:184-188)。現象学的発想や言語論的転回後のポストモダンの立場を受け入れるなら、本来の事実はその存在を括弧に入れられるか、そもそもその存在が疑問視されるのである(北田 2001)。過去の事実は固定されるべきものではなく、常に再構成されるべきものである。この哲学的立場を拒否するとしても、少なくとも科学的研究の意義は、実践的な観点からは、現在を歴史的に条件付けてきた過去を再構成することであって、過去に生きた対象者の意味構成をそのまま再現することではないだろう。

図1 生活記録に対する対象者と研究者の時間的位置

<対象者>による構成		
[過去]	日記	一次的意味構成の「事実」* : 対象者が生きた経験的事実
	解釈	現在を歴史的に条件づける **
[現在]	分析	二次的意味構成の「事実」: 現在の観点からする歴史的事実
<研究者>による再構成		
<p>* 本来の事実の存在は括弧に入れられるか、 そもそも、その存在が否定される</p> <p>** 歴史的条件は現在の状況から新たに作り出されるものであって、 過去の事実が本来もっていたものではない。</p>		

『米澤弘安日記』を例にして研究者が留意すべき点を箇条書きにすると以下ようになる。

- (1) 分析の妥当性は研究者が現在の時点で構成した歴史的条件が、対象者の過去を再構成することによって得られているかによる。
- (2) 歴史的条件は弘安の時代に間主観的に成立していた「事実」に見出されなければならない

- い。ただし、この間主観性は基本的に弘安の主観を通して分析されなければならない。
- (3) 誰にとっての「事実」であるかを常に反省する必要がある(対象者が一時的に構成する「事実」と研究者が二次的に構成する「事実」の区別)。
- (4) 対象者が誰を意識して記述したか、また研究者は誰に対して執筆するのが、対象者と研究者の広義の政治性を知る上で重要である。対象者や研究者にとっての「重要な他者 (significant others)」や「一般化された他者 (the generalized other)」とは誰か。

3.2 『米澤弘安日記』の分析枠組みとバイアスの意義

ここで、筆者が共同研究を行う際の分析枠組みや問題関心を示しておく。

米澤弘安はおもに大正期と第二次大戦後に活躍した象嵌職人であることから、弘安の日記は近代日本の社会的合理性のあり方を検討する好材料になる。ここで、社会的合理性とは、集団主義を再構成して得られる研究上の概念であるが、シュッツ的な意味で当該の成員にとって合理的であることを第一義とする。社会的合理性では特定の他者との相対的な人間関係が重視される。伝統的な性別規範や年齢規範に基づく権威主義的上下関係が克服されれば集団主義も合理的になり得るという発想である。伝統的集団主義の再構成から社会的合理性へという方向は、儒教ルネッサンスの観点から現代日本を考察する場合に成立しえる、ひとつの方向性である⁽³⁾。今回の日記分析では、社会的合理性が成立し得るための条件を、近代から現代に移行する際の地方都市金沢の象嵌職人のエートスに見出すことが可能である。

問題は、筆者の先行研究の枠組みを共同研究者でどの程度、共有できるかであろう。筆者の研究テーマと分析枠組みは筆者がこれまでの先行研究のレビューで行ってきた図式であるが、必ずしも、研究者の間で共有されているとは限らない。先行研究の再解釈には研究者個人のバイアスが反映される。そのため、この段階でのメモ書きやコーディングをデータベースとして共有する必要はない。むしろ、筆者の図式は研究者のトライアングレーションで、共同研究のテーマを明確化するための材料であるにすぎない。研究者各人のバイアスは異なる観点から問題にアプローチすることを意味し、共同研究においては分析や解釈の妥当性を相互にチェックするための視点になる。

3.3 弘安の日記における社会的合理性のあり方

『米澤弘安日記』を通読して筆者の図式を適用すると、準拠集団のカテゴリーとして<家族・親族>、<近隣・仲間>、<仕事関係>の3つが重要になり、これらが弘安の周囲世界 (Umwelt) を構成していると考えられる。社会的合理性は周りの人びととの相対的な人間関係によって規定されることから、弘安にとって重要な他者が誰であるかを知ることが弘安の社会的合理性を分析する上で必要になる。

<家族・親族>レベルでは妻との関係が権威主義的ではなく互恵的であることがみられる。妻の実家からの経済的援助も受けていたようである。ただし、自身の家族の家計のために金銭を使うというより、貧乏な中でも親族のために金銭を工面する弘安の人の良さが分かる (田中: 119-121)。

<近隣・仲間>では「中越先生建碑」や「梅澤先生建碑」の出来事にみられるように、恩の

重視、仲間との合意、筋の通し方、社会的承認の獲得の仕方など、弘安の社会的合理性がもっともよく表れる。弘安は近隣や仲間のために東奔西走する人間であった。

<仕事関係>では、職人として妥協することがなかった。営利の追及はせず、まっとうな仕事、仕事仲間や世間に認められる仕事をする傾向があった。勤勉で向上心があり、小学校の同窓生でもあり弘安の仕事のよき理解者でもあった画家の玉井敬泉が「重要な他者」であった。

弘安は家族重視で安定志向のタイプであると予想される。また、生活倫理としては孝、恩、義理を大切に、職業倫理としては<職分のまっとう>を大切にしていた。とくに人間関係の相対性が顕著であり、権威主義的態度ではなく相互尊重もしくは互惠的態度をもっていた。弘安は当時の夫または職人としては柔軟な思考をもった人物であることが窺える。

3.4 分析箇所の抽出

研究者は自らの関心からテキストを通読し、分析テーマを選択する。日記分析の場合に問題となるのは、膨大なテキストからどのテーマを選ぶか、また、そのテーマに即して日記のどの箇所をデータに選択するかという問題である。データを選択するために日記の記述にメモを付けたり、コーディングをしたりする作業が必要になる(佐藤 2002:301-322)。以下、膨大な日記記述からテーマに即したデータを抽出する方法とその手順を示す。

第一の段階では、日記に記述された言葉をキーワードにしてテーマを選定するのが妥当であろう。まずは日記を通読し、全体の文脈から研究者が重要と感じる事柄を選んで、メモに書き出しておく。第二の段階で、パソコン・ソフトを活用し、その出来事に関わるキーワードで当該箇所の記述を抽出する(出来事のデータ群)。第三の段階で、出来事のデータ群にメモ書きやコーディングをしてデータベースを構築していく。

例えば、『米澤弘安日記』を通読すると、亡くなった恩師の石碑を仲間と共同で建立するという出来事が記述されている。これは<近隣・仲間>レベルのエピソードであり、弘安の人物や生き方を知る上で重要な出来事であると考えられる。それゆえ、石碑建立に関わる日記本文中の言葉をキーワード(「石碑」、「建碑」、「趣意書」etc.)にして日記記述を抽出し、「仲間による恩師の石碑建立」のデータ群をまとめる。このデータ群を基にして分析や解釈を行うのである。

テキスト全体から特定の記述を抽出することは、全体の文脈性を無視することになる。しかし、日記の場合は、特定の出来事に関する記述を抽出することによって、かえって日を追った文脈を浮き彫りにすることが可能になる。日記記述のように、多くの事柄、人物、関心が平行して記述されている場合、テーマ毎に日記記述を抽出した方が、そのテーマの文脈性を明示化しやすいからである。

生活史の構成においても、研究者がテーマごとにインタビューの前後を入れ替えて語りを編集することがある。この作業は日記分析にとっても不可欠である。日記分析の利点は、データ群を抽出しても日付の順番によって文脈をみることができることである。例えば、「仲間による恩師の石碑建立」に関わる日記記述を抽出しておく、そのテーマの中で出来事の経過を追跡することがスムーズに行える(パソコンによる日記データベースの抽出は日記記述を京大カード等に分割記入し、そこから抽出するのと同じことであるが、データ数が膨大に

なると京大カードでは収拾がつかなくなってしまう)。日記からテーマに応じたデータ群を抽出することは、文脈の無視というよりも、テーマに応じて分析可能な文脈を見つけ出すための手段になる。

実際にパソコン・ソフトのエクセルを活用して、「仲間による恩師の石碑建立」をテーマに日記記述を選択し、そのデータ群を抽出してみよう(表2)。

表2 コーディングとデータ群の抽出

	A	B	C	D
1	大5年3月1704	1457	・米村松太郎様今回高野山千百年法會ニ当地より約三百計の團體參詣せしを記念として石碑を作り寶船坊ニ建て度く 臺共ニ一尺計りの高さニなるだらうと云ふ話 父は一円寄附せられた(后三)	石碑建立
2	大5年4月0705	1469	・米村様が石碑ニ付福田様や松本様等の據出金の事を尋ニ来られた故未だ報告なき福田様へ行つて貰ふ 松本勇三様より阿八餅を貰ふ	石碑建立
3	大5年7月0502	1504	・米村方より高野山參詣記念石碑出来し 来ル九日向山の寶泉坊ニ於て除幕式を舉行するから午前八時半迄ニ來會して呉れとの案内ありしと	石碑建立
4	大5年7月0901	1505	・米村松太郎様等の世話にて昨年四月高野參詣圖にて其記念碑を作られ向山寶泉坊ニ高野山開創千百年記念と石碑が建設され本日午前九時除幕式を執行さる 父は參詣せられた 雨模様があるので八十名程の來會者なりしと	石碑建立
5	大5年10月2501	1544	・夕 安江町の久保君が来て今夜西村君方へ寄りて中越先生石碑ニ付相談したき故出席して呉れとの事で夜、天満宮へ參詣して安江君を問ふと病氣であるとの事 久保君方へ行き共ニ堅町西村君方へ行く 時二七時、待つ程ニ參る人八笠間君 越野君 外ニ安田君 吉田君て此二氏八程なく歸られた 東京の玉井敬泉君より西村君へ来た手紙ニ石碑の事ニ付希望を書いてありを見た 大方八賛成にて具体的の談八 らさりしか 来ル十日頃ニ世話人の總會を開きて協議を開きいよいよ活動を始むる事ニ決し後ニ御馳走か出て十一時散會し同道ニて歸る 久保君と西村君八明日小橋町へ佐々木先生を問ひ名簿の急調を依頼し僕は玉井君へ送る報告を出す事ニなつた	石碑建立
6	大5年10月2601	1544	・玉井敬泉君へ昨夜西村方にての集會の様を報告する事を約して来たから昼休ニ書くべく尚落選の事ニ付奮勵の手紙も共ニ書き中越先生石碑の趣意書を依頼し参考として梅澤先生の時のものを同封して送る 五刃ありき 三時頃迄掛つたが古田様から来て話して居ると半日休業したやうな譯だ(后三・四半)	石碑建立
7	大5年10月3008	1546	・夜玉井君へ趣意書及石碑の大サ等ニ付至急返事をして呉れとはかきを出す	石碑建立
8	大5年10月3103	1546	・玉井君より返事来り 文展落選ニ就て今後の覚悟等書いてあり中越先生石碑の趣意書や石碑の形状等ハモウ少し考へて後ニ送ると云つてあつた	石碑建立
9	大5年11月0203	1548	・今夜久保君方へ寄るとの事であつた 午後三時頃玉井君より石碑の設計圖が来たから之を持って夜八時頃より久保方へ行く 程なく安江君、西村君笠間君が来たから来る五日幹事總會の席上話の順序ハ安江君が書き全會招集文ハ僕が拙いのを作り久保君笠間君僕の三人にて約三十枚の葉書を書き十二時頃終りあとは打合にて一時帰りたり	石碑建立

弘安は<近隣・仲間>の準拠集団を生涯大切にしていた。小学校同窓生との交流、親友との交流が日記には多く記述された。これを代表する出来事として「恩師の石碑建立」というデータ群を抽出する。このデータ群のコーディングには妻子への日記面接や田中(1974)その他の先行研究が重要な補足資料になる。弘安自身の言葉だけでは不明確な点や、また、弘安が意図的に書かなかった、または書けなかった箇所があるからである。コーディング作業には、まず日記を通読する必要があることは当然だが、同時に日記面接、その他の資料を通読し、弘安の置かれていた状況を把握しておく必要がある。フィールドワークで対象者と直接に接するような状況を、日記という過去に書かれたデータを解釈する場合であっても、再現することが質的研究における分析と解釈には必要となろう(佐藤2002)。

表2で、エクセルを活用したデータベースの構築の仕方を示す。

作業 : 日記記述からキーワードでデータを抽出する準備をする。まず、エクセルデータの1行目にデータのタイトルを挿入する。タイトル名はA列「年月日文番号」、B列「頁」、C列「記述」にした。C列の記述の重要と思われる箇所を赤字に変えていく(メモの代用)。

作業 : 簡易の抽出法(「オートフィルタ」)を使用して、キーワード(例えば「石碑」と「建碑」)が含まれる記述データを抽出する。抽出したデータにはD列に「石碑建立」とコードを付ける(「仲間による恩師の石碑建立」では字数が多くなるので「石碑建立」と簡略化した)。これは第一段階のコーディングである。

作業 : 抽出した記述データを日記原本と照らし合わせて、前後の文脈から非該当のパラグラフを削除する。

作業 : 抽出したデータ群から、さらに関連単語(例えば「趣意書」と「募金」)を選択し、それをキーワードにして石碑建立に該当するパラグラフを抽出していく。抽出したパラグラフにはD列に「石碑建立」のコードを付ける。

作業 と作業 は「仲間による恩師の石碑建立」のデータが抽出され尽くしたと判断できるまで繰り返す(新しいキーワードによって新しいパラグラフが追加されない時点で終了)。

以上のように抽出したデータ群から「恩師の石碑建立」のストーリーを読み取り、分析や解釈のためのメモ書きや抽象的なコーディングを加筆していくことになる。

3.5 今後の作業

以下、次号の課題になるが、E列に「仲間による恩師の石碑建立」に関わる日記面接の該当箇所、F列に田中(1974)その他の該当箇所を記入してデータベースの構築をさらに進める。G列で日記記述をカテゴリー化する(例えば、準拠集団毎に社会的合理性を分類する)。F列に記述内容の類型化を記入していく(例えば、「勤勉」、「互惠性」、「分限」、「恩」、etc.などの先行研究から得た類型概念を当てはめる)。こうして準拠集団ごとに類型化された社会的合理性のパターンをまとめ、分析と解釈のためのデータ群抽出と第二段階のコーディングが完了することになる。

本号では、共同研究を行うための準備として、日記のデータベース化と第一段階のコーディング作業の留意点を検討した。次号の課題は、社会的合理性のあり方を弘安の日記と妻子

への日記面接, その他の補足資料から具体的に分析することである。

〔注〕

- (1) トランスクリプトする際のバイアスを避けるために, 調査者のトライアングレーションを実施することがある。筆者が以前参加した, 在日韓国・朝鮮人の生活史のインタビュー調査(谷 2002)では, まずテープ録音をトランスクリプトする作業が共同研究のメンバーに割り当てられ, その後, 実際に調査に居合わせた調査者がスクリプトをチェックするという手順がとられた。また, 記述されたテキストだけでは発話の内容が解釈できないときは, 調査に参加した複数の調査者(発話の状況に居合わせた者)と協議し, それでも解釈できないときは, 実際に対象者に確認するという作業がなされた。調査者のトライアングレーションを実施することによって研究者間でスクリプトの共有化を図り, さらに, 文字テキストに表れない状況等についても共有化を図った。
- (2) 『米澤弘安日記』を研究するグループ(米澤研究会)に筆者は2004年4月より参加し, 弘安の娘に共同で日記面接調査を実施してきた。今後も米澤研究会は継続し, 日記面接や金沢の職人組合の資料, その他の郷土史料を収集していく予定である。米澤研究会では日記面接においても調査者のトライアングレーションを実施しており, 研究者全員(4名)が対象者に会うことを原則としている。
- (3) 筆者の先行研究の図式は, 日本, 韓国, 中国の青年のアンケート調査およびインタビュー調査と在日韓国・朝鮮人へのインタビュー調査で作られたものである。具体的な先行研究としては内藤の近江商人の論文(内藤 1941), 櫻井や川島の義理や恩に関する研究である(櫻井 1961, 川島 1951)。これらの先行研究は明治, 大正, 昭和初期の日本人のエトスを扱った論文であり, それらを板谷の現代的視点(板谷 1995)を援用して近藤が再構成して作成した。具体的には近藤(2001)を参照のこと。

〔参考文献〕

- フリック, ウヴェ 2002 『質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』小田博志他訳, 春秋社
- Flick, Uwe and Steinke, Ines (ed.) 2004 *A Companion to Qualitative Research*, Sage Publications.
- 板谷茂・中嶋航一他 1995 『アジア発展のエトス』勁草書房
- 川島武宣 1951 「義理」, 『思想』9 No.327 岩波書店, pp.21-28.
- Kelle, Udo 2004 'Computer-assisted Analysis of Qualitative Data' in *A Companion to Qualitative Research*, ed. by Uwe Flick, Ernst von Kardorff and Ines Steinke, Sage Publications. pp.276-283.
- 北田暁大 2001 「歴史の政治学」, 『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』吉見俊哉編, 講談社選書メチエ, 講談社, pp.173-210.
- 近藤敏夫 1997 「ミードの時間論」『G・H・ミードの世界』船津衛編著, 恒星社厚生閣, pp.173-190.
- 近藤敏夫 2001 「日韓中における青年の集団主義的態度 家族と親族集団における相対的態度を中心にして」, 『日・韓・中における社会意識の比較調査』佛教大学総合研究所紀要別冊, pp.23-40.
- 近藤敏夫 2002 「生活倫理と職業倫理の持続と変容」, 『民族関係における結合と分離』谷富夫編著, ミネルヴァ書房, pp.541-558.
- 古屋野正伍・青木秀男 1995 「日記における『個人対歴史』の問題」, 『人間科学論究』3, pp.65-76.
- 溝口雄三・中嶋嶺雄 1991 『儒教ルネッサンスを考える』大修館書店
- 水越紀子 2002 「日記分析における『書き手と<他者>の関係』 夫の日記に描かれた妻の生活史構成を事例として」, 『ソシオロジ』第四七巻第一号, pp.37-53.
- 内藤莞爾 1941(改稿 1964)「宗教と経済倫理 浄土真宗と近江商人」, 日本社会学会年報『社会学』vol.8, pp.243-286
- 中野正大・宝月誠編著 2003 『シカゴ学派の社会学』世界思想社
- Neuman, W. Lawrence 2003 *Social Research Methods: Qualitative and Quantitative Approaches, Fifth Ed.*, Allyn and Bacon.
- Park, R.E., 1925, "The Urban Community as a Spatial Pattern and a Moral Order", in E.W. Burgess (ed.) *The Urban Community: Selected Papers from the Proceedings of the American Sociological Society*, pp.3-18.

- Punch, Keith F. 2005, *Introduction to Social Research: Quantitative and Qualitative Approaches 2nd ed.*, Sage Publications
- 桜井厚 2002 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 櫻井庄太郎 1961 『恩と義理 社会学的研究』アサヒ社
- 佐藤郁哉 2002 『フィールドワークの技法 問を育てる, 仮説をきたえる』, 新曜社
- Schütz, Alfred 2004[1932], *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, UVK Verlagsgesellschaft mbH.
- Strauss, Anselm L. 1987, *Qualitative Analysis for Social Scientists*, Cambridge University Press.
- Strauss, Anselm L. and Corbin, Juliet 1998, *Basics of Qualitative Research 2nd ed.*, SAGE Publications
- 田中喜男 1974 『加賀象嵌職人 米澤弘安の人と作品』北国出版社
- 谷富夫編著 2002 『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房
- 坪田典子・水越紀子 1999 「近代都市職人の生活世界」, 『日本都市社会学会年報』17号, 日本都市社会学会, pp.127-143.
- 『米澤弘安日記』上・中・下・別巻, 米澤弘安日記編纂委員会, 金沢市教育委員会 2000年～2003年

(こんどう としお 現代社会学科)

2005年4月27日受理